

「安息日のいやし」

2015年09月19日

ルカによる福音書 14 章 1 節～6 節。安息日のことだった。イエスは食事のためにファリサイ派のある議員の家にお入りになったが、人々はイエスの様子をうかがっていた。そのとき、イエスの前に水腫を患っている人がいた。そこで、イエスは律法の専門家たちやファリサイ派の人々に言われた。「安息日に病気を治すことは律法で許されているか、いないか。」彼らは黙っていた。すると、イエスは病人の手を取り、病気をいやしてお帰しになった。そして、言われた。「あなたたちの中に、自分の息子か牛が井戸に落ちたら、安息日だからといって、すぐに引き上げてやらない者がいるだろうか。」彼らは、これに対して答えることができなかった。

またまた、安息日のいやしの出来事である。主イエスはファリサイ派のある議員から食事に招かれた。議員とはイスラエルの最高法院（サンヒドリン）の議員であろう。最高法院は 71 名で構成される最も権威ある議会である。議員たちはイスラエルの最高の家柄、資産、学識を持ち、民衆から尊敬され、かつ恐れられていた人々である。ファリサイ派の議員であるから、律法の権威であったに違いない。彼が食事に招いたのは、主イエスを探り、落ち度を探すためであったのか、民衆から篤い信頼と尊敬を集めている主イエスに会って見たかったのか、理由は定かでない。出来事の成り行きを見ると、必ずしも敵意を持っていたとは思えない節がある。

主イエスは「時の人」であったから、人々の視線は主イエスの一挙一動に集まった。その場に水腫を患っている人がいた。水腫は体のいたる所でむくみが出て、痛む病気である。栄養不足が発症させるという。何の労働もしてはならないと規定された安息日にいやしを行う主イエスのうわさは知れ渡っていた。主イエスと水腫の人を見て、人々の関心はたちまち高まり、注目が集まった。その視線を受け止め、律法の専門家やファリサイ派の人々に、主イエスの方から「安息日に病気を治すことは律法で許されているか、いないか」と問いかけた。許されないことは、皆が知っていることである。しかし、彼らは黙っていた。安息日に病気をいやしてはならないという律法に疑義を持っていたからかも知れない。すると、主イエスは病人の手を取り、いやしてお帰しになった。いやされた病人の喜びと感謝は記していない。そして、主イエスの力にあっけにとられた彼らに「あなたたちの中に、自分の息子か牛が井戸に落ちたら、安息日だからといって、すぐに引き上げてやらない者がいるだろうか」と言われた。ファリサイ派の議員も、彼を取り巻く律法の専門家も答えることができなかった。安息日と言えども、病気で苦しむ人をいやすことに反対できなかったからである。法が人に不幸を押し付け、縛ることはあってはならない。

自民党が提示している「憲法改正草案」の第十三条（人としての尊重等）は「すべて国民は、個人として尊重される。生命、自由及び幸福追求に対する国民の権利については、公益及び公の秩序に反しない限り、立法その他の国政の上で、最大限に尊重されなければならない」と規定している。個人が尊重され、幸福を追求する権利は公益及び公の秩序に反するならば認められないとしている。「公益及び公の秩序」に反するかどうかの判断は権力が決めるということである。憲法は権力者を縛るものであるが、自民党の「憲法改正草案」は、逆に、権力が国民を規制するものになっている。